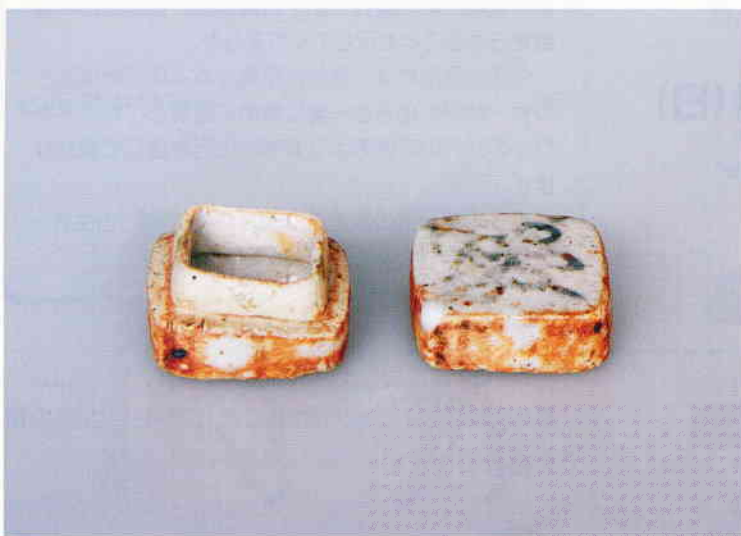


収蔵品紹介

可児市久々利の大平、大萱には、桃山時代から江戸時代にかけて多くの窯が築かれ、黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部といった焼き物が生産されていたことで、全国に知られています。

可児郷土歴史館では、これらの優れた焼き物の収集と展示を行っていますが、今回から郷土館だよりで、順次紹介していきます。



志野梅花絵香合 16世紀
幅4.2cm 高2.8cm

ロクロ成形後、平面四方形に整形された香合である。上面に梅花とみられる下絵を描き、受部と底部裏を除いて長石釉を濃く薄く掛ける。特に側面の緋色が見事で、合わせも良好である。

土岐市久尻の元屋敷窯かと思われる。

織部梅花文向付 17世紀
幅14.8cm 高4.7cm

脚の付いた薄作りの向付で、見込みの丸い窪みと正方形の皿部の対比に趣がある。達筆な鉄絵や花の赤楽、たらしした銅緑釉、薄い長石釉の発色はこの上ない。表裏共にトチ痕が4ヵ所ずつある。

久々利大萱の弥七田窯かと思われる。なお、同じ絵柄の向付5客揃いも郷土歴史館で所蔵している。



特別展

「化石から見た可児」

～ヒラマキウマの生きた時代と その成り立ち～

● 会 期 ●

7月26日(火)～9月11日(日)

可児郷土歴史館では、夏休みの期間中、特別展「化石から見た可児」を開催します。

可児市を中心とする「可児盆地」一帯は、今から2200万年～1700万年前の地層が堆積し、化石が数多く産出します。中でも、大型の哺乳動物化石が産出することで知られ、近年は、小型の哺乳動物化石の存在も明らかとなりました。

特に、平成22年7月には、以前に可児市で発見されたヒラマキウマと呼ばれるウマの祖先の化石が、東アジア最古級のものとなり、新種のウマの可能性が明らかとなりました。

最近のこうした調査・研究の成果は、あらためてこの地域が動植物化石や古環境の研究に重要な位置を占めることを示してくれました。

今回の展示では、各地に所蔵される可児地域産出の動植物の化石を一堂に集めて展示し、ヒラマキウマの時代の可児の様子を、化石を通じて紹介します。

また、岐阜県の大地的な歴史を、古生代・中世代・新生代の化石によってたどります。

展示構成

1 熱帯の珊瑚礁

約2億5千万年前、赤道付近にあった珊瑚礁が石灰岩として大垣市に残っています。そこから見つかる化石は当時の様子を教えてください。

大垣市・金生山産出の化石を通し珊瑚礁の世界を紹介します。



バスロトマリア(貝)の化石(岐阜県立博物館蔵)

2 岐阜県にも恐竜がいた

今から約1億2千万年前、日本列島はアジア大陸の一部でした。そこは豊かな森や湖沼が広がり、恐竜などがすんでいました。

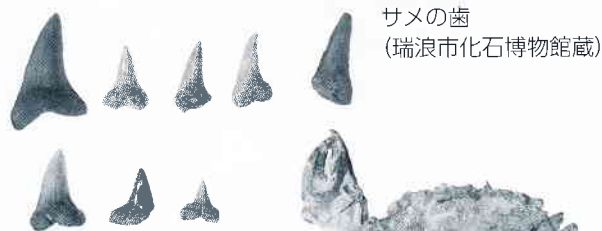
高山市荘川などから産出した化石から当時の様子を紹介します。



ディノニクスの全身骨格(複製・岐阜県立博物館蔵)

3 デスモスチルスのいた海

可児市の地層が堆積したときと同じ頃、隣の瑞浪市には浅い海が広がっていました。そこに生きた動物を紹介します。



サメの歯
(瑞浪市化石博物館蔵)

ノコギリガザミ(カニ)の化石
(瑞浪市化石博物館蔵)

ちびっ子のみんなへ

クイズに挑戦
化石をプレゼント

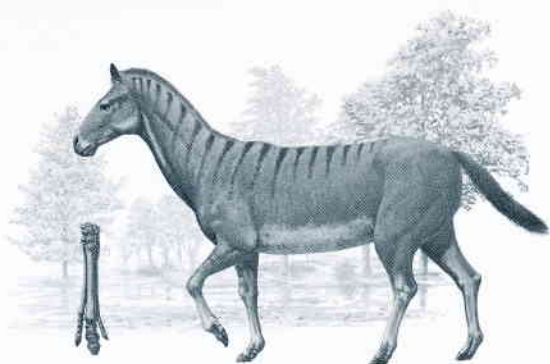
展示を見ながらクイズをやろう。正解者にはもちろん、本物の「サメの歯」の化石をプレゼント

- 対象は小・中学生
- 高校生以下は、入館無料（大人は1人310円）

4 森と湿原に生きた動物たち

約2000万年前、日本列島はアジア大陸から分離しつつありました。当時、可児市あたりは湿原と豊かな森が広がっていました。可児市周辺で見つかった動物、植物の化石から、当時を再現します。

ヒラマキウマ



アンキテリウム復元図(福井県立恐竜博物館/山本 匠)

昨年、福井県立恐竜博物館宮田和周氏らの研究によって、この化石が約1800万年～1700万年前のものと分かり、東アジア最古級で、ユーラシア大陸のものとは違う新種のウマである可能性があることが判明しました。



ヒラマキウマ
(アンキテリウム)
の上顎骨(個人蔵)

ゾウ

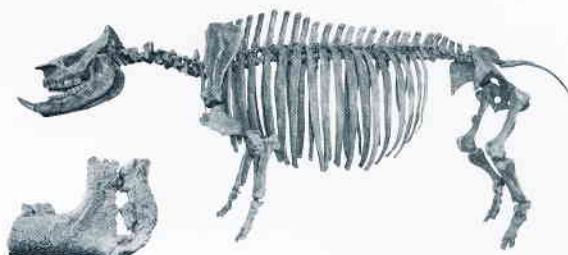


ゴンフォテリウム・アネクテンス
の上・下顎骨(複製)
(館蔵)

御嵩町中切番上洞の平牧層から発見されました。

日本に渡ってきた最も古い象で、下あごには前に突き出た牙があります。可児地域で5個の化石が発見されており、小型のゾウであったと思われます。

カニサイ



カニサイの
左下顎骨(複製)
(館蔵)

キロテリウムの全身骨格
(複製・美濃加茂市民ミュージアム蔵)

可児市菅刈の中村層から発見されました。

哺乳動物の化石の中では、このサイの化石が最も多く発見されています。

最近の研究により、体の大きさや歯冠の形状からキロテリウム属からブラキポテリウム属とする考えが出されています。

講演会のお知らせ

今回の特別展開催にあわせて、「ヒラマキウマ」の化石を調査・研究された福井県立恐竜博物館の宮田和周先生をお招きして講演会を開催します。当日は、郷土歴史館の入館料を無料としますので、多数のご参加をお待ちしています。

- ◇日時 8月27日(土) 午後1時30分～
- ◇場所 可児郷土歴史館(久々利公民館 2階)
- ◇講師 福井県立恐竜博物館主任研究員 宮田和周先生
- ◇演題 ヒラマキウマの生きた時代とその成り立ち

可児市史調査報告書第5集

**「可児市の記念碑」
を発行、好評販売中**

可児市史調査報告書第5集として、「可児市の記念碑」を発行しました。

これは、市史編纂に伴う資料調査の一環として平成16年度から同22年度に行った市内の記念碑（石碑）の調査結果をまとめたものです。明治時代以降の記念碑187点の設置場所、大きさ、碑文を紹介し、1点ずつ写真を載せました。

開墾や開拓の苦勞、災害やその復興の様子、郷土の発展に尽くされた人々の功績などが、記念碑から読み取ることができます。



- ◇販売価格 1冊 1,000円
- ◇販売場所 可児郷土歴史館

写真で見る今・昔 (1)

可児郷土歴史館は、『可児市史』の編纂過程で収集した20万枚を超える膨大なデジタル写真（デジタルデータ）を、平成23年4月、市史編纂室から引き継ぎました。そのほとんどは、個人所蔵の文書類を複写したのですが、中には、近・現代の可児市の様子を写した貴重な写真も数多く含まれています。

このコーナーでは、学校や連絡所、あるいは個人宅に所蔵されたこれらの写真を順次掲載し、明治・大正・昭和の「ふるさと可児」を紹介します。

●明治時代の道直し



土田連絡所旧蔵の写真で、市史編纂資料として平成20年7月に編纂室に移管、収集されたものである。

写真はこの資料群にあったアルバムの中の1枚で、同じ道直し作業で撮られたと思われる別の写真のアルバム台紙に「明治四十三年十二月廿三日」の日付が書かれている。

場所は、土田地区の字西小池地内で、後方に大脇地区の集落が写っている。写真の道は、現在の県道菅刈今渡線にあたり、近世では木曾街道（尾張街道ともいう）と呼ばれ、名古屋城下と中山道を結ぶ重要な街道であった。元和9年（1623）に尾張藩の公道として整備され、土田下町・中町・上町地区に宿場がおかれ、現土田公民館付近に本陣が設置された。

道直しの参加者の身なりは、足袋にワラジばき、脚絆を巻いて、手拭いで頬かぶりする者も多い。クワを振りおろしての作業で、大八車も数台見える。大正2年（1913）に県道に認定される前は郡道で、遠くには洋服に帽子の役人の姿もある。

写真の頃の道幅は不明であるが、明治21年の地籍図には幅二間六分とある。また、後方の立派な屋敷は、昭和初期には薬屋を営んだという。残念なことに平成22年にすべて取り壊されてしまった。

可児の民俗行事紹介 1 夏の年中行事

土田白鬚神社 輪くぐり

茅の輪をくぐって無病息災を祈る夏越しの大祓えの行事で、市内では土田白鬚神社で毎年、7月31日の夜に行われている。

茅の輪は、祭礼前日、氏子総代のメンバーによって木曾川の河原で刈り取った茅を、竹を芯にして巻き、高さ2メートルほどの輪にして作る。

また、茅の輪の横には祭壇がつくられ、ご幣のほか茅の束（3本束、5本束、7本束）と盥、供え物が置かれる。

氏子には、事前に人形（ひとがた：形代）が配られ、男性は白色、女性は赤色の人形に名前を書き、願い事や体の悪いところなどを書き、体をなでるようにして息を2回吹きかける。人形は氏子総代を通じて神社に集められ、祭壇に供えられる。

輪くぐり神事は、午後6時から始まる。神官の祝詞の後、茅の3本束を両手で持って盥の水をご幣にかけ、拝礼して右回りに茅の輪をくぐる。次に5本束を使って同様に拝礼し左回りにくぐり、最後に7本束で同様に拝礼して右回りにくぐって終わる。神官、氏子総代に続いて参拝者が輪くぐりをおこない、長い列ができることもある。神事で清められた人形は、昔は木曾川に流されたという。

現在では、土田地区の夏祭りとして地域の人たちによる夜店や映画会などが開かれ、多くの人々で賑わう夏の行事となっています。



▲輪くぐり(平成17年7月)



▲ガイキの神送り(平成14年7月・土田渡地区)

その他の夏の行事

この他、市内で行われる夏の年中行事は多い。兼山地区では、百万遍の町流しが7月1日から7日までおこなわれる。百万遍と書かれた角行灯を先頭に、ご幣を中央に捧げて大きな数珠にとまって、鉦、太鼓を叩きながら「光明遍照・十方世界・念仏衆生・摂取不捨・南無阿弥陀仏」と唱えながら各町内を回る。また、兼山下町地区では、盆明けの「うら盆」の日から三日間、辻念仏（市指定重要無形民俗文化財）が行われる。元禄年間から現在まで続くという伝統行事で、無縁仏の供養や病気にならないようにとの暑気払いの行事とされている。

この他、ワラで作った人形に和紙の着物を着せ、「ガイキの神送るぞ」と唱えて集落内を回り、悪霊を追い出す行事を行う地区もある。市内では一般に7月に行われる。

兼山歴史民俗資料館だより

平成23年6月5日（日）、兼山の可成寺で恒例の森蘭丸供養祭（蘭丸祭）が行われました。

天正10年（1582）6月2日、織田信長とともに本能寺で最後を遂げた森蘭丸の供養祭に、この日も全国から多くの人々が訪れ、資料館も大変な賑わいをみせました。

平成22年度 資料寄贈者

貴重な資料を郷土歴史館に寄贈いただきました。

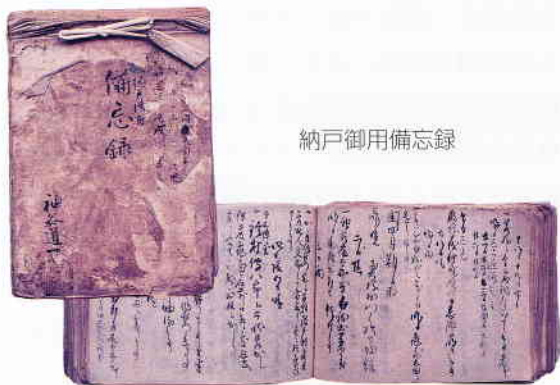
○主な寄贈資料

「被仰出申渡帳」、「納戸御用備忘録」（神谷清子氏寄贈資料）

両資料とも神谷家から寄贈を受けた資料のなかにある。

寄贈を受けた「被仰出申渡帳」は、久々利に居を構えた領主、千村家の当主が出した命令を家老役所で家臣等に伝えた控帳で、天保2年、同3年、弘化3年、嘉永7年、安政3年の5冊が神谷家に伝わっていた。年ごとに綴られた冊物である。

「納戸御用備忘録」は、神谷藤太郎が小納戸役として千村家に出仕していた天保14年から安政2年にかけての日記である。藤太郎は後、千村家家老職を務め、名を佐左衛門と改め、維新後は、道一と称した。



納戸御用備忘録

神谷家は千村家の家老をつとめた家で、道一は文政6年（1823）に生まれ、北越戦争では千村隊の第二隊長を務めた。明治12年（1879）、郡役所が開設されると初代可児郡長に就任し、その後は恵那・益田・吉城郡長に就いた。職を辞した後は現在の岐阜市に住み、そこで『新撰美濃志』『関ヶ原合戦図志』『岐阜県地誌略』の刊行などに携わっている。

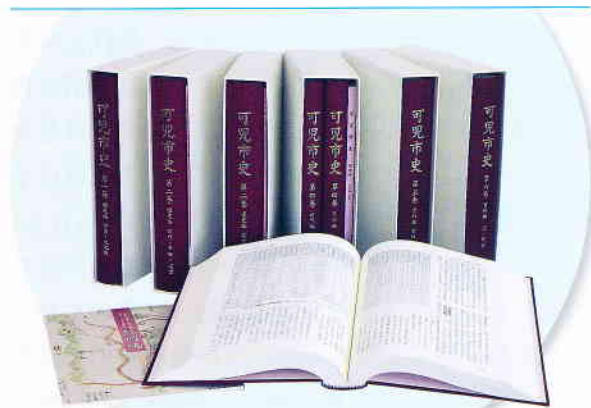
いずれの資料も、千村家の家政や支配のようす、家臣の動向などを知る好資料であり、中島勝国氏によって「可児歴史叢書 四」「同 九」として翻刻文が出版されている。また、この他、明治25年発行された神谷道一著の『関ヶ原合戦図志』の原稿や執筆にあたっての資料などもある。

○その他の資料寄贈者

水野正幸、尾崎詔、大竹庄司、杉山清、松原初代、神谷清子、溝口幹雄、岡田明文（敬称略）

ありがとうございました。

刊行物のご案内



可児郷土歴史館、兼山歴史民俗資料館では、郷土の歴史に関するさまざまな刊行物を販売しています。興味のある分野の基礎資料としていかがでしょうか。

○主な刊行物

- 「可児市史」第1巻～第6巻 各巻共 3,500円
- 「可児市の記念碑」 1冊 1,000円
- 「可児市の仏像」 1冊 400円
- 「兼山町史」復刻版 1冊 3,150円
- 「続兼山町史」 1冊 1,000円
- 「史料に見る兼山の商人」 1冊 500円 など

この他にも、多くの刊行物を販売しています。詳しくはホームページでご確認下さい。

可児郷土歴史館

〒509-0224 岐阜県可児市久々利1644番地1
TEL・FAX 0574-64-0211
Eメール kyodorekisikan@city.kani.lg.jp

- 開館時間／午前9時～午後4時30分 ●休館日／月曜日、祝日の翌日、12月26日～1月5日
- 入館料／大人310円（30名以上の団体250円）、高校生以下無料